

# 小林多喜二 早春の賦ニユース

第1号 11月16日発行  
小林多喜二―早春の賦  
を観る会  
事務局電話  
(821) 0832

## 「小林多喜二 “早春の賦” を観る会」が結成



昨年は、小林多喜二の生誕百年、没後七十周年にあたる年でした。これを記念して米倉斉加年さん演出で、演劇「小林多喜二―早春の賦」が各地で上演されました。

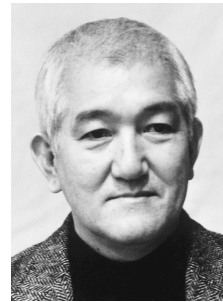
その劇は大きな反響があつたため、まだ上演していない地方での上演の準備をしているということです。

こうした中、来年一月十八日に長崎で公演することが決まりました。準備会が各方面に観る会への参加を呼びかけ、十一月十日に、「小林多喜二―早春の賦を観る会」が結成されました。

この日の会合は、準備会を代表して、元市民劇場事務局長の中村新七さんからのあいさつがあり、演劇の制作委員会の釘崎さんより、米倉斉加年さんからのメッセージが紹介され、これまでのいきさつや上演の意義などの説明がありました。また事務局として中村新七氏（代表）、事務局員に岡、溝口、久保田、高橋、堀江、堤の各氏があたることになりました。（後日五島氏も事務局に参加）。

これから事務局への参加をさらに募り、観る会会員の拡大、前売券の普及などに共に力を尽くしましょう。

小林多喜二―早春の賦を観る会  
のみなさんへ 米倉斉加年



私は小林多喜二について多くを知らない。知っていることは、小林多喜二は小説を書いて殺されたということとです。作家は言葉で世界を表現する。その作家を殺すということは言葉を殺すということだ。作家を殺す国家は文明を殺す国家だ。

多喜二は「自分の文学は、ただ小説を書くということじゃない。働いている大勢の人たちの世の中のために役に立つ小説を書くことだ。そのために一生を捧げるつもりだ」と書いている。多喜二の言う「大勢の人たち」の「世の中」のために役に立つことは、国家にとっては役に立たないことだった。大勢の人たちは安い賃金で長時間働かされ、人間としての権利を認められず、苦しい生活にあえいでいる。その底辺の人たちに心を寄せ、目を向け、その人間の苦悩を書いた小説は、多喜二にとっては政治ではなく文学だった。ペン一本で強大な権力に立ち向

かっていくのが多喜二の文学的資質であつたのだ。

国が戦争へ向かうとき、必ずと言ってよいほど愛国心が叫ばれる。戦争に反対するものは愛国心のない非国民と呼ばれる。すりかえの始まりである。愛国心は戦争するためにあるのではない。敵対する国を憎悪し闘うためにあるのではない。真の愛国心は、祖国の文化を愛し、祖国の山河を愛し、民族を誇りに思うことである。そのような愛国心は戦争を回避し、世界の平和を希み、自由を愛するものだ。

多喜二は心から大勢の人たちの平和を願った。そのために書いた「自由と世界平和のために」。多喜二こそ真の愛国心の持ち主だった。

多喜二を考えることは過去へ戻るのではなく今を考えることなのだ。

近年のアメリカの中東への介入は、世界の平和を大きく揺るがすものだ。そのアメリカに加担している日本に、戦前の多喜二の死の時代が重なってくる。長崎のみなさんが「小林多喜二―早春の賦」を観て下さることが、世界平和への第一歩です。私たちはみなさんに観ていただくことで成長し、みなさんの声に勇気づけられ支えられて小林多喜二を語りつづきたいとおもっております。